慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Pauline Elizabeth Hopkins編集のThe Colored American Magazine : エリート主義と超自然領域
Sub Title	Pauline Elizabeth Hopkins's the colored American magazine : the nineteenth-century Elitism and the supernatural realms
Author	奥田, 暁代(Okuda, Akiyo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.204(177)- 219(162)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0219

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Pauline Elizabeth Hopkins 編集の *The Colored American Magazine* ——エリート主義と超自然領域——

奥田　暁代

「それは，彼女が中流階級のエリートだからだわ。」

筆者が Joanne M. Braxton に会ったとき，19世紀末から20世紀初頭にかけて類いまれなる才能を発揮した黒人女性作家 Pauline Elizabeth Hopkins があまり評価されない理由を尋ねたところ，彼女はこう答えた。Braxton は *Black Women Writing Autobiography: A Tradition Within a Tradition* (1989) で知られる黒人批評家である。

同時代の黒人女性でも，奴隷制度廃止運動で重要な役割を果たした Frances Ellen Watkins Harper や，リンチ撲滅のために尽力した Ida B. Wells などの活動家が盛んにクローズ・アップされるなか，人生の大部分を速記タイピストとして過ごした Pauline Elizabeth Hopkins は，いまひとつ人気がない。再発掘のきっかけとなる Ann Allen Shockley の論文 "Pauline Elizabeth Hopkins : A Biographical Excursion Into Obscurity" が1972年に発表されると更なる再評価が期待されたが，(1) 現在でも上記のように「エリート主義的」と一蹴されることが多く，批評家 Houston A. Baker などは，彼女の小説 *Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South* (1900) を「知識のひけらかし」と批判している。(2) 黒人指導者に関する研究書，*Uplifting the Race: Black Leadership, Politics, and Culture in the Twentieth Century* (1996) の著者 Kevin K. Gaines は，Hopkins を「帝国主義者」とまで呼んでいる。(3)

本稿では，Hopkinsに対するこのような根強い「エリート主義的」という批判を踏まえながら，当時の黒人知識人のあいだで顕著であったエリート主義と彼女が黒人誌の編集者として目指したこととがいくつかの点において異なることを明らかにする。黒人のイメージ改善，地位向上，白人中心アメリカ社会参入などが声高に主張されていたなかで，Hopkinsは黒人文化の在り方としてあいまい領域を創り出すことに専念していた。

劇作家，女優，歌手，小説家などさまざまな顔を持つHopkinsであるが，ここでは1900年代に黒人読者を対象に発行された黒人文芸誌 *The Colored American Magazine*(4) の編集者としての彼女に注目したい。その理由として，一つには，新聞あるいは雑誌が黒人社会において重要な役割を果たしたからである。特にその編集者は多大な影響力を発揮した。事実，Booker T. Washington, W. E. B. DuBois, Marcus Garveyといった黒人指導者たちは，雑誌の編集や発行によって指導的立場を確固たるものにした。(5) もっとも，女性が雑誌の編集者といった重要なポストを任されることは殆どなかったため，Hopkinsの編集者就任はまさに画期的であった。当初は彼女も雑誌の「女性欄」編集者として迎えられただけなのだが，その役割はまたたく間に拡大していった。雑誌の主だった執筆者となり，短い期間に小説を三つ連載したほか，数多くの特集記事やエッセイも書いている。彼女抜きにしては *Colored American* を語れないほどその執筆量は多かった。さらには，雑誌の編集にも深く関わるようになっていく。彼女の名前が“Literary Editor”として明記されているのは，1903年の5/6月号から1904年の4月号までだが，公表される以前からすでに実質的な編集者であったと推測することができる。(6) 公表が遅れたのは，雑誌を発行していた出版社の経営陣が女性であるHopkinsの編集者としての影響力を公的に認めたくなかったからだと考えられる。

雑誌 *Colored American* に注目するもう一つの理由は，Hopkinsが編集に携わっていた時期が，彼女の執筆活動の全盛期と重なるためである。雑誌に関わっていた1900年から1904年のあいだに小説，短編小説だけでな

く多数の記事を書いていたHopkinsが，雑誌から退いた後は，しばらく他の黒人誌に記事を寄せていたほかはほとんど何も書かなくなったところを見ても，彼女と雑誌を切り離して考えることはできない。この文芸誌こそが彼女の創作と発表の場だったのである。

黒人知識層を読者に想定した*Colored American*は，19世紀末から20世紀初頭にかけての黒人社会の思想を反映している。そこにはエリート主義がうかがわれ，雑誌の編集長であったHopkinsとエリート主義の関係を否定することはできない。しかし，それは彼女に特有のものであったのだろうか。当時の黒人知識人のエリート主義は，アメリカ社会に浸透していた黒人のネガティヴなイメージを改善しようとする「ニュー・ニグロ」運動，一部の教養ある黒人女性が黒人大衆を「引っ張り上げ（uplift）」ようとするクラブ運動，はたまた古代アフリカ文明を意識した黒人の歴史書にまで顕著に見られるのである。以下，それぞれの動きとHopkinsとの関係および思想の違いについて述べてみよう。

雑誌を読んでまず目につくのは，奴隷の子として生まれながらも黒人大学の学長にまでのぼりつめた過程を描いたBooker T. Washingtonの自伝*Up from Slavery*（1900）のような成功物語の数々である。これは時代背景に照らし合わせてみれば納得がいくであろう。この時代に黒人は選挙権などさまざまな権利を奪われただけでなく，人種隔離のJim Crow法によって下級市民として位置づけられてしまった。この時代のアメリカはまさに「排除」の時代であった。さまざまなレトリック，とくに黒人がいかに白人より生物学的に劣っているか，がまことしやかに述べられ，それらに基づいて黒人はアメリカ社会から疎外されていった。黒人批評家Henry Louis Gates, Jr.によれば，「クーン」，「サンボ」，「マミー」など黒人のネガティヴなイメージは，南部プランテーションを舞台にした大衆小説，白人が顔を黒く塗って歌や踊りを披露するミンストレル・ショー，あるいは黒人が生物学的に劣っていることを主張する研究書などのほか，トースターのカバーから，雑誌の広告，絵はがきにいたるまで浸透していた。(7) こういったアメリカ社会の人種差別的な風潮にあって，当時の黒人

知識人たちは，劣った存在としての黒人のイメージを打破しようと躍起になっていた。その際，成功物語は，黒人もまた白人と同じように社会的に成功することができる，だから人種的に劣っているのではない，と反証を示すのに有効だったのである。

たとえば *Colored American* では，1903年の5/6月号に黒人兵の活躍をドキュメントした“The Negro in the Navy”と題する記事がある。メッセージは単純明快で，逆境にありながらも黒人は成功することができる，実際すでにしている，と主張する。記事はドキュメンタリーの形式をとってはいるものの，その構造は明らかに成功物語の形をとっている。この文芸誌には，実に毎号，成功物語が一つは掲載されており，“Our Uncrowned Hero: J. B. Parker”(Oct. 1901)，“Charles Winter Wood; From Bootblack to Professor”(Sep. 1902) などがその例である。雑誌に伝記記事が多く掲載されたのもイメージ改善を意識してのことであろう。しかし，こういったイメージ改善の根底には，一握りの教養ある黒人がアメリカ社会に認められたいと願う同化主義 (assimilationism) があった事情も否めない。そもそも成功物語は，白人社会に流布していたホレイシオ・アルジャー神話の模倣であった。白人社会への同化を望めば，南部の貧困に暮らす黒人大衆との連帯を回避しなければならず，ここに知識人たちのエリート主義は顕著であり，成功物語を多く掲載した Hopkins もまたその責任の一端を負わねばなるまい。

しかし，多くの黒人エリートが「ニュー・ニグロ」のイメージを通してアメリカ社会参入を図ろうとしていたのに対して，Hopkins は白人社会への同化を主張してはいない。彼女の小説 *Contending Forces* には多くの混血が登場するが，なかでも Charles Montfort と Jesse Montfort の兄弟は，一人が「白人」として，もう一人が「黒人」として生きる設定になっている。こうした設定から Hopkins が明らかにするのは，黒人種と白人種の境界がいかに不明瞭であるかという事実である。さらに Hopkins は人種間に「境界がない」と主張するにとどまらず，人種は一つしかないとまで言い放つ。彼女の最後の小説 *Of One Blood : Or, the Hidden Self*

では，登場人物のあいだに，より複雑な関係が近親相姦と異種混交によって生じている。ここで興味深いのは，混血の友人の（やはり混血の）妻を奪い，犯し，殺した Aubrey Livingston は，絶対的な力を持つ白人男性の権化のように描かれていながら，小説の最後で三人が同じ母親（奴隷）から生まれた事情が明らかになり，彼もまた白人ではなかったとする展開である。次のように Hopkins は書いている。"[B]ut who is clear enough in vision to decide who hath black blood and who hath it not? Can any one tell? . . . No man can draw the dividing line between the two races, for they are both of one blood!"(8) このように Hopkins が人種統合を描いているとすれば，それはアメリカ社会への同化を望んでいるというよりも，白人と黒人の違いの無さを訴えているのだと読めよう。黒人と白人を一つにみなす Hopkins には，同化という言葉はでてこない。この点において彼女のエリート主義は，黒人知識層のそれとは異なっていた。

彼女の *Colored American* には黒人女性の伝記記事も多く（そのほとんどが Hopkins の手によるもの），通常黒人男性のものと思われている成功物語のレトリックは女性にも適用されていた。実際，当時のエリート主義を考えるうえで，黒人女性知識層の存在を無視することはできない。

> [T]hough Afro-American cultural and literary history commonly regards the late nineteenth and early twentieth centuries in terms of great men, as the Age of Washington and DuBois, marginalizing the political contributions of black women, these were the years of the first flowering of black women's autonomous organizations and a period of intense intellectual activity and productivity.(9)

こう Hazel V. Carby が述べているように，19世紀末はまさに黒人女性の時代であり，女性運動の中核をなしたのがクラブ運動であった。女性運動家 Fannie Barrier Williams は，Booker T. Washington, Williams, N. B. Wood 編纂の *A New Negro for A New Century*（1900）のなかで黒人女性のクラブ運動について詳しく紹介しており，黒人大衆を導く必要性を

強く主張している。

> The club movement among colored women reaches into the sub-social condition of the entire race. Among white women clubs mean the forward movement of the best women in the interest of the best womanhood. Among colored women the club is the effort of the few competent in behalf of the many incompetent; that is to say that the club is only one of many means for the social uplift of a race.[10]

ここに見られるように，Williamsの論文において顕著なのは，「引っ張り上げよう」とする姿勢だけでなく，「一握りの優秀な人びと」としての意識である。さらに論文のいたるところで「知能の高い」(intelligent) という単語が繰り返され，優れた女性たちが大衆を導く指導者となるべきだと力説する。紹介されている，1892年創立のThe Woman's League of Washington, D. C. の会員のほとんどは教師であり，これは彼女たちが一般黒人大衆より教養がありしかも影響力を持っているからだとWilliamsは説明している。黒人女性のクラブ運動が，教会を基盤にした運動と異なり非常にエリート主義的であったことがうかがえる。

少なくとも一時期は，Hopkinsが黒人女性のクラブ運動と関わっていたことは確かである。たとえば彼女は，小説 *Contending Forces* の出版に先立って，ボストンにあるWoman's Era Clubで完成した小説を朗読している。その抜粋は全国のクラブでも読まれたという (Shockley 25)。*Colored American* ではどうであろうか。その創刊号は女性部の発足を以下のように宣伝していた。"In our next issue we shall begin a department devoted exclusively to the interest of women and the home" (May 1900, 64)。この女性欄の編集者の役目を任されたのがHopkinsであった。予告どおり，次号では "Women's Department" なるセクションが雑誌に掲載され，その冒頭でHopkinsが女性欄に対する意気込みを "We bring to this column an enthusiastic desire to do good and pleasing work for our lady patrons" (120) と述べているように，雑誌は明らかに

女性エリート層の読者を獲得しようとしていた。女性欄に，National Association of Colored Women's Clubs や Women's Era Club といった黒人女性の組織の紹介／報告が掲載してあるのも，黒人女性のクラブの動向を読者に知らせるのが目的であったと思われる。

さらに，Williams 同様，Hopkins も「教養ある一握りの女性が一般大衆を引っ張り上げる」必要を訴えている。彼女は1902年11月から1903年10月にかけて黒人女性の伝記の連載 "Famous Women of the Negro Race" を執筆しているが，その広告が伝記の意図を如実に語っている。"We have hundreds of virtuous, intelligent, cultivated, [C]hristian, young colored women who have risen to take their places in society as wives and mothers, who have done much and are still doing much to lift the race and its homes." (Apr. 1902, 413) と述べた一節には，「教養ある (intelligent, cultivated)」，「引っ張る (lift)」などの言葉が見られ，当時のクラブ運動の思想がうかがえる。と同時に，Hopkins のエリート主義的運動への関与も認めざるを得ない。

しかし，Hopkins がこのクラブ運動に終始賛同していたとも言い難いのである。先に挙げた *Colored American* の女性欄は何の釈明もなしにわずか一号で終わってしまう。この廃止に Hopkins が関与したのではあるまいか。もちろん，黒人男性たちの女性運動を軽んじる風潮からクラブ活動に関する欄が削除された，などほかの理由も考えられなくもない。しかし，この頃から Hopkins が雑誌の実質的な編集者になっていった事情を考慮すると，彼女の方針として女性欄が削られたと説明する方が妥当ではなかろうか。女性欄がなくなった後も，Hopkins は黒人女性の伝記を連載したりしているのだから，女性の問題に興味がなかったわけではない。すると先の決定は，大衆を引っ張り上げるのが目的であるクラブ運動に疑問を持つようになったからだと考えるのが至当であろう。実際，雑誌編集長の座を追われた後の Hopkins は，限られた活動しかしておらず，クラブ運動で活躍したという記録がない。初めは黒人女性のクラブ運動に賛同していた Hopkins は，次第に「大衆を引っ張り上げる」以外のことに目

を向けていったのであり，それについては以下に述べる。ここで強調しておきたいのは，彼女をエリート主義的と決めつけると彼女の思想の変遷を見落としてしまう危険があるということである。

当時の黒人知識人がエリート主義的だと言われるのには，さらにもう一つ理由がある。そのアフリカに対する姿勢である。彼らにとってアフリカの存在はきわめて重要で，とくにエジプトの古代文明は，黒人としての誇りあるいは連帯感を喚起するのにも，黒人を劣った人種だとする差別的な考え方に対抗するのにも有益であった。多くの知識人は，たとえばDuBoisが使った“double-consciousness”なる概念用語が端的に示すように，黒人でありアメリカ人であるという，二つのアイデンティティーのあいだを揺れ動いていた。黒人のアイデンティティーを選択すれば，下級市民身分を認めることにつながり，アメリカ社会に認められようとすれば，黒人であることを捨てなければならなかった。このジレンマを解決してくれそうなのが，エジプト文明の存在であった。黒人が劣った存在でないばかりか，古代エジプトが西洋文明にも影響を及ぼしたというのであれば，黒人のアイデンティティーとアメリカ人のそれは矛盾しない。だからこそ黒人知識人は挙ってアフリカを主張したのである。

しかし，Dickson D. Bruce, Jr. も指摘しているように——Bruceの論文ではGeorge Washigton Williamsら19世紀末の歴史家のエリート主義が論じられている——，黒人エリートのアフリカ信奉は歪んでいた。(11) 古代文明のうち西洋文明に通ずる部分だけを自分たちの文化として受け入れるかたわら，現代アフリカに対しては否定的で蔑視するからである。その上，自分たちの優越性を主張しアフリカ人を救済せねばと考える。これは黒人大衆を引っ張りあげてやらねば，という考え方に結びつく。

雑誌の連載記事“Famous Women of the Negro Race”で，Hopkinsは以下のように述べている。

> Rome got her civilization from Greece; Greece borrowed hers from Egypt, thence she derived her science and beautiful mythology. Civilization descended the Nile and spread over the

delta, as it came down from Thebes. Thebes was built and settled by the Ethiopians. As we ascend the Nile we come to Meroe the queen city of Ehiopia and the cradle of learning into which all Africa poured its caravans. So we trace the light of civilization from Ethiopia to Egypt, to Greece, to Rome, and thence diffusing its radiance over the entire world. (May 1902, 41)

このようにエチオピアにあらゆる文明の起源を見出すのは，上記 George Washington Williams など当時の黒人歴史学者たちに共通する。彼ら同様 Hopkins も，読者にアメリカ黒人が優れた種族の子孫であると認識させるために，古代アフリカ文明の存在を強調したわけである。

その上で彼女は，古代アフリカに言及するにあたり，白人の人種差別主義者による解釈を批判している。たとえば，当時のエジプト学者のあいだでは，古代エジプト人が白人だったとする説が主流であったのに対し，*Of One Blood* は彼らが黒人であったと明言して，こうした差別的見解を否定する。Hopkins が古代エジプトやエチオピアを持ちだすのは，黒人が劣った存在でないことを証明するためというよりも，「歴史的」あるいは「科学的」に規定しようとする白人流レトリックの嘘を証明するためであった。雑誌 *Colored American* の1903年5/6月号には，無記名だがおそらく Hopkins が書いた "Venus and the Apollo Modeled from Ethiopians" と題する記事が見える。まず，有名なヴィーナス像とアポロ像がどちらも黒人奴隷をモデルに彫られたこと，それについてはローマやギリシャの歴史書に言及があること，しかし現時点では確固たる証拠がないことを述べ，しかるのち最近人類学者によって，黒人種は白人種よりも腕が長いという事実（白人と黒人が異種であることの証拠）が発見されたため，先の彫像は黒人がモデルであったと証明された，との結論に持っていく。ここにおける Hopkins の意図は，美しいと賞賛されるものが黒人の姿である以上やはり黒人は優れているとする主張ではなく，科学者たちの研究がいかに愚かであるかとの指摘である。白人と黒人の違いを生物学的に位置づけようとする作業の無益——結局は黒人の肉体美を認めてしま

う徒労——を皮肉と共に批判したのである。このようにHopkinsがアフリカを重視する姿勢には，ほかの黒人知識人とは違ったところがある。

次いで，Hopkinsが現代アフリカを見下しているとは言い切れない事実を論証してみよう。たとえば，*Of One Blood*の連載と同時期に，A. Kirkland Sogaによる“Ethiopians of the Twentieth Century”も連載されていた（May/June, July, August, September, 1903）。内容について詳述する紙幅はないが，当時の南アフリカ（“Ethiopians”は「アフリカ人」と同義で使われたと思われる）の置かれていた状況がよくわかる。また，Sogaが寄稿した経緯が，Hopkinsによって次のように説明されている。

> The Colored American Magazine is not only National but International in character. Our correspondents include patrons in China, Hawaii, Manila, West Indies and Africa.... Some time ago we received the following letter from Mr. A. Kirkland Soga, editor of “Izwi Labanut” (The Voice of the People), a weekly native organ published in English at East London, South Africa, and the sole medium of native opinion in the colony. / After receiving this letter we perfected arrangements with Mr. Soga for a series of articles on “The Ethiopian of the Twentieth Century,” fully illustrated by special photographs. (May/June 1903, 467)

以上の言葉からは，現代アフリカを軽視する態度は見られない。それどころかアフリカについて学ぼうとする姿勢が顕著なのではないか。この記事には予告どおり写真がふんだんに使われており，アフリカの酋長の写真なども含まれていた。もしHopkinsが「ニュー・ニグロ」のイメージに固執していたならば，たとえばWashingtonのように白人上層階級のきちんとした身なりにこだわっていたならば，裸同然のアフリカ人のイメージは提供しないであろう。彼女の編集する雑誌には，Sogaの連載以外にもアフリカに関する記事は多く，そういった記事の多くを書いているC. C. Hamedoeもアフリカ人であった。[12] 彼女が古代アフリカ文明だけを利用

しようとしたのではないことは確かであろう。つまり Hopkins もまた多くの黒人エリートと同じようにアフリカに対して興味を持っていたが，そこにはエリート主義的な態度は見られなかったと言わなければならない。

このように Hopkins が当時の黒人知識層のエリート主義に影響されながらも，いくつかの点で彼らと異なる考え方を持っていたことは明らかで，この違いこそが *Colored American* の意図に結びつく。ハーレム・ルネッサンス期の The National Urban League の機関紙 *Opportunity* や，NAACP の *Crisis* など政治運動の一部であった雑誌に対して，*Colored American* は19世紀末の黒人社会の文化的高揚を象徴していた。歴史家 August Meier は，この時期を「文化的ナショナリズム」の時代と位置づけている。黒人の歴史に対する関心が高まり，黒人の文学あるいは文化的な生活を確立していこうとする動きがみられたという。(13) 編集長を Hopkins が務めていたあいだ，*Colored American* にはこういった文化的高揚が顕著であり，それはたとえば表紙に記されたモットーにも表れている。"Devoted to Literature, Science, Music, Art, Religion, Facts, Fiction and Traditions of the Negro Race." ところが1904年以降 Hopkins が編集から退くと，*Colored American* は大きく様変わりする。彼女が編集に携わっているあいだはモットーどおり文芸誌の体裁をとっており，連載小説，短篇小説，詩，書評のほかには，歴史に関する記事，伝記，旅行記などが載せられていた。それが編集者が交代した後は，フィクションの占める割合が低くなり，ビジネスに関する記事が多くなった。少なくとも Hopkins の編集長時代は，*Colored American* には19世紀末の文化的ナショナリズムが反映されていたのである。

では Hopkins はフィクション重視の文芸誌で何を目指したのであろうか。当時，あるいはその後のハーレム・ルネッサンスの時代に明らかになったように，黒人社会の階級差，政治的立場の違い（たとえば，DuBois 派と Washington 派）などから黒人が連帯することの難しさが認識されるようになっていた。彼らのようなエリートがいかにして南部の貧困に暮らす黒人たちと連帯するのか。あるいは Washington のようなたたき上

げの黒人たちと，DuBois のようなエリート階級出身の黒人たちはどう連帯できるのか。"Above all it [*The Colored American Magazine*] aspires to develop and intensify the bonds of that racial brotherhood, which alone can enable a people, to assert their racial rights as men, and demand their privileges as citizens" (May 1900, 60) と創刊号で宣言されているように，*Colored American* も黒人の連帯を前面に掲げていたが，その編集者 Hopkins もまたその難しさを認識していたと考えられる。人種の規定が非常に不安定な基盤の上になりたっていることはすでに述べた。「一滴でも黒人の血が入っていれば黒人」(ヴァージニア法) とはおよそ非現実的かつ非科学的な論理なのである。しかし，それを指摘した上で，なおかつ黒人の団結を訴えるとするのであれば，何か文化的な面からなさなければならないだろう。批評家 Sean McCann が，"[T]hrough most of her work Hopkins is fundamentally committed to the notion of race as a real, if 'intangible,' quality that links people beyond their capacity for rational awareness or enunciation." と指摘しているように，[14] 黒人を結びつけるのは「人種」の概念であって，肌の色でも黒人の血でもない。つまり生物学的ではなく，観念上の概念なのである。

観念上，あるいは文化的に連帯を図るとはいかなることか。黒人文学の必要性を説く Hopkins であるから，*Colored American* には文学作品が多く採用された。Hopkins 自身もいくつか連載小説を執筆している。たとえば *Hagar's Daughter, A Story of Southern Caste Prejudice* (Mar. 1901－Mar. 1902); *Winona : A Tale of Negro Life in the South and Southwest* (May 1902－Oct. 1902); *Of One Blood ; or, The Hidden Self* (Nov. 1902－Nov. 1903) などである。だが，彼女は若い作家の発掘にも熱心であった。女性作家 Angelina Grimke の最初の作品 "Black Is, As Black Does" が1900年の6月号に載ったとき彼女はまだ20歳にすぎず，Benjamin Brawley もまた，彼の詩が最初に雑誌に掲載されたとき (1902年8月) は20歳であった。雑誌に数多くの詩を寄稿し，書評欄をまかされるようになったため批評家としても成長していった William Braithwaite

が最初に雑誌に登場したのは22歳のときだった。このように，後に認められるようになる作家を見出したHopkinsの編集者としての力量は認めねばならない。しかし，ここで注目すべきは，これら作家には人種を前面に押し出さない作品が多いという事実である。

ではいったいどのような作品が*Colored American*に掲載されたかを見てみよう。Thomas J. Ottenも指摘しているように，雑誌には成功物語と平行して，Hopkinsの手による，あるいは彼女の希望によると思われる，超自然，夢，催眠状態，秘薬，透視力，死者の蘇りなどを扱ったスケッチや小説が多い。(15) こういった作品では，人種問題が扱われていないばかりか，登場人物が黒人か白人かすらもよくわからない。これら超自然的なストーリーによってHopkinsは，白人が規定する黒人のイメージ同様，黒人知識人によるイメージの置換に対しても反発しているように思われる。「オールド・ニグロ」との訣別を意味する「ニュー・ニグロ」は，必然的に教養がなく粗野な黒人大衆を否定することになる。その反面，黒人知識人は古代アフリカ文明を取り込んで「黒人らしさ」を模索する。すでに述べたように，彼らはアメリカ人あるいは黒人のアイデンティティーの選択に悩んでいた。彼女の場合はどちらかを否定するようなことをしない。その事実はHopkinsの作品に端的に表れている。たとえば，William Jamesの影響を受けた短編“The Mystery within Us”を，Cynthia D. Schragerが一見世俗的な成功物語（ragged to riches）に似ていながら精神的自伝（spiritual autobiography）としても読めると指摘しているように，(16) Hopkinsには同時に二つのレトリックを見いだすことができる。Schragerはさらに，HopkinsとやはりJamesから影響を受けたDuBoisとの違いを強調する。彼女によれば，物質主義のアングロ・サクソン文化に対比させて，黒人文化をより精神的世界に近く位置づけたDuBoisと異なり，Hopkinsは両者を対比ではなく共存させた（313）。白人文化と黒人文化の混在はHopkinsの最後の小説*Of One Blood*にも顕著である。エチオピアの「伝説的な都市」が登場するかたわら，オカルト，催眠術，透視など当時流行の「科学」が頻繁にでてくるのである。

超自然的な作品を書くことによって，Hopkinsはさまざまなものを混在させることに成功する。彼女が傾倒した超自然の領域は，歴史が混ざり合う，科学では説明できないような，あいまいな領域であった。このような領域に踏み込むことによって，人種の境界をなくし，さらにはそういったところに黒人文化の在り方を見出そうとする。だからこそ人種問題を前面に押し出した作品よりも，超自然を取り込んだ作品を多く掲載したのであろう。しかし，こうした考え方は，すでに述べたように，黒人エリートたちにはなじみが薄く理解しがたかった。

編集長Hopkinsは，1904年に突然*Colored American*から姿を消す。"Literary Editor"としての彼女の名前が1904年4月号を最後に消えたのであるが，その年の11月号にようやく編集長辞任の理由が公表された。"On account of ill-health Miss Pauline Hopkins has found it necessary to sever her relations with this Magazine and has returned to her home in Boston"(700). ところが，彼女は翌12月，別の黒人誌*Voice of the Negro*に執筆しているのだから，病気というのは真実ではあるまい。Hopkinsは辞めさせられたのである。これは経営陣の交代によるところが大きかったと考えられている。創刊当初から経済的に不安定だった*Colored American*は，1904年にNational Negro Business Leagueで要職にあったFred R. Mooreに買収され，[17] それにともない，上述したように文芸重視よりもビジネス重視の雑誌に様変わりした。しかし，彼女の超自然的な領域への傾倒が，Hopkinsの失脚を招いたとも考えられよう。

*Colored American*を退いたのちのHopkinsは*Voice of the Negro*誌に投稿したが，それも短い間だけで，1916年にWalter Wallaceとともに発行した雑誌*New Era*もわずか二号で廃刊になった。晩年はMITで速記者を務めた彼女が71歳の生涯を閉じたとき，死亡記事を載せた新聞は皆無だったという(Shockly 26)。ハーレム・ルネッサンス期にさまざまな分野で活躍しながら，男性中心の黒人知識人サークルになじめず，最期は一人淋しく死んでいったZora Neale Hurstonを思い起こさせる末路であ

る。Hurstonは黒人女性独自の黒人大衆文化に根づいたフォークロアのレトリックを生み出した。近年活躍めざましい黒人女性作家は，まさにこのレトリックを継承していると言われているが，Hopkinsの提供したあいまい領域もまた現代黒人文学に顕著なのではあるまいか。たとえば，Toni Morrisonの*Beloved*（1987）やRandall Kenanの*Let the Dead Bury Their Dead*（1992）は超自然的な現象を扱っている。Hopkinsが指摘しているように，黒人文化とアメリカ文化の境界は非常にあいまいであり，そのあいまい領域にこそ黒人文化あるいはアメリカ文化の特徴があるとも言える。上述のMorrisonの小説はアフリカを源にしたフォークロアとして理解することも，あるいは英文学ジャンルとして確固たる地位を占めるゴースト・ストーリーとして読むことも可能である。しかし，Hopkinsをエリート主義者と決めつけてしまえば，こうした関係を読み落としてしまおう。彼女がエリート主義的に映るとすれば，それは彼女の編集した雑誌が当時の黒人知識人の思想を反映していたからにすぎず，彼女と当時の黒人エリート主義との違いを弁別しさえすれば，Hopkins独自の価値をもつ文学世界の姿が立ち現れてくるであろう。

注

（1） Ann Allen Shockley, "Pauline Elizabeth Hopkins: A Biographical Excursion Into Obscurity," Phylon 33 (1972): 22-26.

（2） Bakerはこの小説を "a curiosity cabinet of its era" と評し，次のように説明している。"Phrenology, racial politics, Klondike gold discoveries, British manumission, feminism, occultism, and myriad other topics make the pages bristle. It is as though the narrative mind of the text wishes to sound its repleteness, its comprehensive intelligence as a fit complement for the novel's whitened face"(26-28).
Houston A. Baker, Jr., *Workings of the Spirit : The Poetics of Afro-American Women's Writing* (Chicago : U of Chicago P, 1991).

（3） Kevin Gaines, "Black Americans' Racial Uplift Ideology as 'Civilizing Mission': Pauline E. Hopkins on Race and Imperialism," *Cultures of United States Imperialism*, ed. Amy E. Kaplan and Donald E. Pease (Durham : Duke UP, 1993): 433-55.

(4) 以下同雑誌からの引用は，括弧内に出版年月とページ数のみ記す。

(5) DuBois は *Voice of the Negro* あるいは *Crisis* を通して自らの考えを伝えた。Washington はいくつもの黒人新聞雑誌を所有していた。Garvey には *Negro World* があった。

(6) Hazel V. Carby, Introduction, *The Magazine Novels of Pauline Hopkins* (New York : Oxford UP, 1988): xxxi.

(7) Henry Louis Gates, Jr., "The Trope of a New Negro and the Reconstruction of the Image of the Black," *The New American Studies*, ed. Philip Fisher (Berkeley : U of California P, 1991): 340.

(8) Pauline Elizabeth Hopkins, *The Magazine Novels of Pauline Hopkins* (New York : Oxford UP, 1988): 607.

(9) Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist* (New York : Oxford UP, 1987): 6-7.

(10) Fannie Barrier Williams, "The Club Movement among Colored Women of America," *A New Negro for A New Century*, ed. Booker T. Washington, N. B. Wood, and Fannie Barrier Williams (1900 ; New York : Arno, 1969): 382-83.

(11) Dickson, D. Bruce, Jr., "Ancient Africa and the Early Black American Historians, 1883-1915," *American Quarterly* 36 (1984): 684-99.

(12) William Stanley Braithwaite, "Negro America's First Magazine," *Negro Digest* (Dec. 1947): 22.

(13) August Meier, *Negro Thought in America 1880-1915 : Racial Ideology in the Age of Booker T. Washington* (1963 ; Ann Arbor : U of Michigan P, 1988).

(14) McCann, Sean, "'Bonds of Brotherhood': Pauline Hopkins and the Work of Melodrama," *ELH* 64 (1997): 816.

(15) Thomas J. Otten, "Pauline Hopkins and the Hidden Self of Race," *ELH* 59 (1992): 227-56.

(16) Cynthia D. Schrager, "Pauline Hopkins and William James : The New Psychology and the Politics of Race," *Female Subjects in Black and White : Race, Psychoanalysis, Feminism*, ed. Elizabeth Abel, Barbara Christian, and Helene Moglen (Berkeley, U of California P, 1997): 310.

(17) Abby Arthur Johnson and Ronald M. Johnson, "Away From Accommodation : Radical Editors and Protest Journalism, 1900-1910," *Journal of Negro History* 62 (1977): 328.